

ニデック後継社長に岸田氏を決定！

ニデック(旧日本電産)は4月1日付きで岸田光哉副社長(64歳)が社長兼CEOに就く人事を発表した。創業者の永守重信氏(79歳)は現在の会長兼CEOを退任し、代表取締役としてグローバルグループ代表に就任する。現在社長兼COOの小部博志氏は代表権のない会長職に就く。永守氏と小部氏は4年後をめどに引退するという。

〈解説〉とうとうニデックの後継社長が決定した。ここに至るまで数度社長候補者が就任したが、いずれも永守氏のメガネにかなわずクビ。岸田氏はソニーグループで不採算事業を建て直した手腕が評価され、現在最重要部門の車載事業部門の責任者を務めている。後継者の指名は、指名委員会が決定した。社



歴がまだ2年しかなく短いというハンディはあるが、欧州などでの事業の実績と社内での人望の高さなどを評価しての判断だった。

永守氏の後継者は注目を集めていたが、ここ数年間はいずれも失敗。社外からトップを招き、その都度うまくいかなかった自身の後継者をめぐる迷走を反省し、社内の候補者5名から指名委員会に指名を委ねた。CEOやCOO、またグループ代表といった職制には権限と責任に関して外部から見ると不透明な部分が残る。意思決定の権限や業務執行の責任体制があいまいになり、外から見ると誰にどの



ような決定権があるのか分かりにくい。今回も、永守氏はグループの代表として残り、かつ代表権もそのまま。果たして、これで円滑な経営承継が進むのか、まだ今後を見ないと分からない。ニデックのような巨大なグローバル企業になると、一人の経営者で切り回せる範囲を超えている。かといって、集団指導体制で運営すると意思決定のスピードは遅くなり、責任範囲があいまいになる。船頭多くして舟山に登るといふ古来からの格言もある。多くの企業で業績が低迷するときは、えてして意思決定者が錯綜し時間がかかり、中小の迅



速な判断に負けてしまう。どこまで行ってもトレードオフの関係にはなるが、今回の新体制の結果は注目される。3つの巨大企業、ニデック、ユニクロ、ソフトバンク、この3社の後継者問題は注目を集めてきた。創業者があまりに偉大な結果を残し、カリスマ性を発揮し過ぎたこともあり、誰がやっても見劣りする。決算書の事業評価に、後継者問題が明記されるというのは、ある意味すごいことでもあるが、一度迷走すると戻するのに時間がかかる。偉大な創業者の後継者問題。次に決まるのは、ユニクロか、ソフトバンクか。

